

“輝け！ひぐみっ子” だより

～東汲沢小学校教育目標「学びあい 高めあい まちとともにあゆむ ひぐみっ子」～

☎861-5531 <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/higashigumisawa/>

未来へ語り継がれるひぐみっ子に

校長 丹羽正昇

三月。人は、この時期、たくさんの出会いと別れを繰り返し、それぞれに新しい世界へ向けて歩みを進めます。そして、そこには必ずと言っていいほど、新しい物語が生まれます。物語とは、人々が紡ぎだす語りのことです。実はこの「語り」ということが、記憶の伝承につながるのではないかと提唱する人がいます。「語り」は、「話」とは違い、本当に言わねばならぬことに向かって、内容が削ぎ落され磨かれる。だからこそ人々の記憶に残るのだそうです。恣意的であるがゆえに情熱的に聞こえる「話」よりも、意図的で知的な「語り」のほうが、むしろ人々の記憶に残る。初めて知ったときは、正直驚きました。それまでの私は、全く逆のことを考えていたからです。

このことを私が知ったのは、10年前に起こった東日本大震災の被災者の言葉についてまとめられた文章に出会ったときでした。文章の筆者は言います。被災者の話は、「……言い淀み、口ごもり、そして突然の沈黙に断ち切られ。滞る。」反面、「〈語り〉へと生成した〈話〉にはどこか体験の突き放しがあり、一方でそれゆえに悲しみや苦しみがよりいっそう深まる……」のだと。体験を突き放すとはどのようなことを指すのでしょうか。それは、自分を突き放すことであると言い換えてもいいかもしれません。自分のことを自分のことではないように語るからこそ、余計に悲しみや苦しみが伝わってくるというのです。言い伝えや教訓は、まさにそのようにして語り継がれてきました。誰か一人の「話」ではないからこそ、それはいつの時代にも色あせることなく輝き、人の心に響き続ける「語り」になるということなのでしょう。

さて、今年度45周年という節目だった、ひぐみの物語はどうでしょうか。コロナ禍での今年度、私たちは何を「語り」として共有し後世に残すことができるのか。思い返してみると、それは、多くの制約や制限にも負けず、とにかくひたむきに毎日を過ごしたひぐみっ子の姿であったと思います。この一年間のひぐみっ子の姿を、情緒的ではなく理性的に捉えて語り継いでいく。そのためには、ひぐみっ子一人ひとりのエピソードを、個人を突き放して語る必要があります。不安だったのは、我慢したのは、辛かったのは、悲しかったのは、どれも自分だけのものではない。もちろん、うれしかったのも、楽しかったのも、自分だけのものではない。一人ひとりの体験を、一人ひとりの感情を抜きにして語られたとき、はじめて深い感情となって多くの人の心に染みていくのだと思います。困難な時代だからこそ、私だけの辛さ、私だけの悲しさ、私だけの喜び、私だけの楽しさなど、「私」だけの「話」としたらもったいない。それではせっかくの努力や頑張りが、人々の記憶には残らないのです。令和2年度にしか体験できなかった日々を、仲間や友達、ひぐみっ子全員の「語り」にすることで、その物語は、未来のひぐみっ子に語り継がれていき、やがて50周年、70周年、100周年を迎えるひぐみにおいて、その時代、その時代に生きるひぐみっ子の情動となり、時代をリードする新しい原動力になっていくのだと信じています。

ひぐみっ子のみなさん、コロナ禍の一年間、本当にかんげいしましたね。本来わたしは、がんばるという言葉があまり好きではないのですが、それでもあえてみなさんのがんばりに感謝したいと思います。ステイホームから始まった令和2年度。手洗いをしっかりする。出かける回数を減らすなど、大人でもしっかりできないことを、みなさんは見事にやりとげました。でもそれって、仲間、友達、おうちの人、地域の人、ひぐみの先生や職員、その他大勢の人がいたからできたのではないのでしょうか。自分だけの力じゃない。みんなの力を合わせたからできたんだ。いつまでも、人に感謝できるひぐみっ子でいてください。